

現代日本の財政政策と財務省の政策思想 (XVI)

——『図説 日本の財政』を素材にして——

梅 原 英 治*

(目次)

はじめに (第74巻第6号)

第1章 『図説』における日本財政史とその目的について

(1) 『図説』における日本財政史の配置

(2) 『図説』日本財政史の3つのタイプ (以上, 第75巻第1号, 第2号)

(3) 『図説』における日本財政史の目的について

a. 目的意識性を喪失した『図説』の日本財政史

b. 日本財政史に冒頭文の有るものと無いもの

c. 冒頭文の有るもの (1959~1961, 1963, 1966~1997各年度版)

d. 冒頭文の無いもの (1955~1958, 1962, 1964, 1965, 1998~2023年度版) (以上, 本号)

第2章 『図説』における戦前日本財政史について (以下, 続く)

第3章 『図説』における戦後日本財政史について

(凡例)

① 『図説 日本の財政』は『図説』と略す。また, 刊行号は西暦で呼ぶ (昭和31年度版→1956年度版, 平成25年度版→2013年度版, 令和2年度版→2020年度版, など)。

② 引用文中の下線および [] 内は引用者 (梅原)。「/」(スラッシュ)は改行の印, 「.....」は中略の印。

③ 古い文献 (1955~57年度版など) からの引用では, 大文字の“捨て仮名”は小文字に (「けつきよく」→「けっきょく」など), 旧漢字は新漢字に (「發」→「発」など) 直した。

第1章 『図説』における日本財政史とその目的について (承前)

(3) 『図説』における日本財政史の目的について

a. 目的意識性を喪失した『図説』の日本財政史

そもそも『図説』は何のために歴史編 (部・章・節) を設けているのだろうか。

『図説』2023年度版は「はしがき」で, 「本書は, 財政の仕組みや現状について, 図表を用いながら, できるだけ具体的にわかりやすく, また幅広く解説した本」¹⁾であり, 「そのうえで, 本書は, 財政の解説書として, 財政の理論 (第I部) や当初予算の解説 (第II

* 大阪経済大学名誉教授

1) 2023年度版, はしがき, iii ページ。

部), 歴史(第Ⅲ部), 海外の状況(第Ⅳ部)のほか, 財政投融资, 国庫金制度, 税制改正, 金融政策(第Ⅱ部各章)など関連制度について解説しています」²⁾と自らを紹介しているように, 日本財政全般についての解説書として, 財政の理論や制度, 年度予算, 歴史, そして海外の財政事情を網羅している。日本財政史がその一環として取り上げられていることはいうまでもない。

ただ, 日本財政の歴史といっても, 明治以来150年以上もの間の様々な出来事について, 何を取り上げ, どのように書くかで, 歴史の内容は変わってくる。『図説』の歴史編に込められた目的(意図・狙い)は何であろうか。それが歴史編の冒頭や「はしがき」などで書かれていれば分かりやすく, 読み手にも伝わりやすい。

だが, 1998年度版以降, 『図説』の歴史編は, いきなり本文で始まる。例えば, 2023年度版の第Ⅳ部「わが国財政のあゆみ」は, 1「近代国家創設期の財政」(1)「明治維新と財政」の見出しの後, 「維新戦争にともなう多額の債務をかかえて出発した新政府は……」³⁾という文章が来る。そのため, 読者には, そこから何を読み取らせようとしているのかが伝わらない。

そういう形が四半世紀も続いている。それだけでなく, 『図説』の歴史編は, 6「バブル期以降の財政(昭和60年以降)」—(2)「財政健全化への取組(平成9年~)」—(ロ)「財政構造改革法の凍結と景気回復への取組み(平成10~13年)」の後を, 内閣総理大臣の交代を時期区分にして経済対策などを付け加えるだけになっている。

連載再開時の本稿(第Ⅻ回)で指摘したように, 内閣総理大臣基準の時期区分は形式的・表面的で, 内容の軽重に基づくものとなっていない。『図説』は公務員試験向けの参考書でもあるから, 近年の内閣の経済財政政策について書き記しておきたいのかもしれないが, 内容の検討や事後的な評価はなされていない。言い換えれば, 近年の『図説』の歴史編には目的意識性が失われている。前年度版踏襲型の編集ではそうなるのは当然だ。

2) 同上。

3) 同上, 400ページ。なお, 2023年度版「はしがき」の次の一文——すなわち, コロナ, ウクライナ侵略, 気候変動, 大規模地震などを挙げた上で, 「国民の暮らしや命を守るために必要な財政出動を躊躇なく行うためにも, 危機に対応できる財政余力を今後も確保し, かつ, 危機への財政上の対応が万が一にも財政そのものの危機につながらないようにしていかななくてはなりません。振り返ってみれば, 日露戦争で戦費調達のために発行した外債を我が国は敗戦後も長らく償還し続け, その他戦前に発行した外債を1988年までかけて償還してきました。こうした積み重ねによって, 日本という国に対する信用も守られてきました。先人たちの過去の努力・取組みの上に立ち, 我々の世代も歳出・歳入の両面からの改革を続け, 経済再生と財政健全化の両立を図っていくことが重要です。そうした努力を積み重ねることによってはじめて, 豊かで持続可能な社会を作り上げ, 希望ある社会を次の世代につなげていくことができます」(ivページ)——は, 歴史編と関わるものと読めなくもないが, 歴史編に関連する文章はない。歴史編は相変わらず前年度版の踏襲だ。なお, この引用文の中の「振り返ってみれば」から「償還してきました」は前年度版とほぼ同じ(「その他戦前に発行した外債を」を加筆した)文章である(2022年度版, vページ)。

b. 日本財政史に冒頭文の有るものと無いもの

a で、近年の『図説』の歴史編はいきなり本文から始まると書いたが、歴代の『図説』をいきなり本文から始まるものとそうでないもの、つまり、歴史編の冒頭に序文のような文章が有るものと無いものに分けると、有るものは1959～1961、1963、1966～1997各年度版の36冊（52.2%）、無いものは1955～1958、1962、1964、1965、1998～2023各年度版の33冊（47.8%）で、ほぼ半々である（表15-1～15-6、本稿末に掲載）。ただ、後者のうち26冊は1998年度版以降であるから、1997年度版までは冒頭文が有るものの方がほとんどだった。また、1965年度版までは、冒頭文が無いものでも、本稿第1章（2）で詳述したように、『図説』の他の個所で歴史編と関わる文章を置いて、その意図が汲み取れるようにされていた。

本稿では『図説』の歴史編（部・章・節）の目的を整理する。まずは、冒頭文の有る36冊では、どのような文章を掲げてきたかを見ていこう。

c. 冒頭文の有るもの（1959～1961、1963、1966～1997各年度版）

c-1. 1959～1961各年度版の冒頭文

1959、1960各年度版の第2章「わが国財政の歩み」と1961年度版の第3章「日本の財政の歩み」の冒頭文はほぼ同じである⁴⁾。以下がそれで、図「明治以来国の予算はどのように使われてきたか」を参照する形になっている。分かりにくい図なので、表に変更した（表16）。

「わが国が近代国家としての歩みをはじめてから、すでに1世紀近い年月が経った。最初の出発である明治維新の際にも、再出発の時ともいえる第2次大戦終了時にも、ともにわが国は先進諸国にくらべて、いわば数段低いところから歩み出さねばならなかった。そのハンディキャップを埋めてゆくために、財政に与えられた役割は、常に大きいものであった。もちろんその間の財政には、ヨーロッパ諸国の長い歴史の間に生じた移り変わりと同様のものを見ることはできない。むしろ、1世紀近い間に西欧の数百年の歩みが圧縮されているともいえる。財政の仕事もしだいに大きくまた複雑になってきたが、第2次大戦の終了を境として、くっきりと対照的な性格のちがいがみられる。戦前の財政の重点が近代産業の育成と軍事力の拡充を中心とする強力な近代国家の実現にあったとすれば、戦後のそれは国民全体の福祉の増大にあるといえよう。」⁵⁾

ここでは歴史編の目的が直接述べられていないが、①日本が「明治維新の際にも」、「第2次大戦終了時にも」、先進諸国から「数段低いところ」から出発したため、日本財政は「西欧の数百年の歩み」を1世紀程に圧縮するような「大きくまた複雑な役割」を担うこ

4) 「ほぼ」というのは、1961年度版では、漢字をひらがなにするなど変更されているからである。「年月が経った」→「年月がたった」、「明治維新の際にも」→「明治維新のさいにも」、「ハンディキャップを埋めてゆく」→「ハンディキャップを埋めていく」（表15-1参照）。

5) 1959年度版、36～37ページ；1960年度版、45～46ページ；1961年度版、105～106ページ。引用は1959年度版より。

表16 国の一般会計歳出決算（目的別内訳）

（単位：1940年度まで千円、それ以降は百万円、％）

項目	1890 年度	1900 年度	1910 年度	1920 年度	1930 年度	1940 年度	1950 年度	1960 年度
国家機関費	21,878	30,662	59,405	139,916	164,981	328,448	68,085	169,564
地方財政費	39	240	430	1,225	1,673	302,912	108,505	332,475
防衛関係費	25,830	133,807	196,287	709,692	446,082	2,949,549	111,634	163,493
対外処理費	—	—	—	—	—	38	1,024	30,845
国土保全及び開発費	3,515	6,981	17,063	76,942	92,059	182,228	93,597	294,420
産業経済費	7,487	61,656	60,513	165,521	244,531	528,517	104,283	164,279
教育文化費	1,149	6,116	9,015	41,998	139,772	205,472	21,073	211,322
社会保障関係費	431	2,032	2,639	10,115	17,847	96,468	54,265	231,123
恩給費	678	4,336	28,320	55,576	149,116	295,543	5,058	116,284
国債費	19,351	34,499	171,624	95,091	275,182	906,837	58,441	26,460
その他	1,678	12,422	23,857	63,901	26,621	64,200	7,330	2,862
合計	82,125	292,750	569,154	1,359,978	1,557,864	5,860,213	633,295	1,743,148
国家機関費	26.6	10.5	10.4	10.3	10.6	5.6	10.8	9.7
地方財政費	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	5.2	17.1	19.1
防衛関係費	31.5	45.7	34.5	52.2	28.6	50.3	17.6	9.4
対外処理費	—	—	—	—	—	0.0	0.2	1.8
国土保全及び開発費	4.3	2.4	3.0	5.7	5.9	3.1	14.8	16.9
産業経済費	9.1	21.1	10.6	12.2	15.7	9.0	16.5	9.4
教育文化費	1.4	2.1	1.6	3.1	9.0	3.5	3.3	12.1
社会保障関係費	0.5	0.7	0.5	0.7	1.1	1.6	8.6	13.3
恩給費	0.8	1.5	5.0	4.1	9.6	5.0	0.8	6.7
国債費	23.6	11.8	30.2	7.0	17.7	15.5	9.2	1.5
その他	2.0	4.2	4.2	4.7	1.7	1.1	1.2	0.2
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（出所）大蔵省百年史編集室『大蔵省百年史』別巻、1969年、138～140ページ、より作成。

とになったこと、②戦前の財政は「近代産業の育成と軍事力の拡充を中心とする強力な近代国家の実現」、戦後の財政は「国民全体の福祉〔広い意味でのそれ〕の増大」に重点を置いて「くっきりと対照的な性格のちがいがみられる」と述べて、日本財政の役割や戦前・戦後の違いを読み取ることを読者に求めている。

c－2. 1963年度版の冒頭文

1963年度版では、第3章「日本の財政の歩み」の冒頭に次の文章を掲げている。

「長い鎖国の禁を解いたとき、すでに産業革命を終えた西欧諸国とわが国との文明の落差は大きく、人びとはそこにわが国の危機を感じた。明治維新は、このような危機に立って、みずからの独立を守るため、古い政治体制を廃し、西欧的な学問、技術、制度をとり入れて近代国家を建設しようとする、民族のエネルギーを示すものであった。

それから、およそ1世紀に近い年月が流れた。この間の歩みは、もちろん平たんなものではなかった。戦前においては、戦争の連続の中で、軍事力の強化と経済力の拡充との相克を経験しなければならなかったし、また、戦後においては、過去に蓄積した富をすべて喪失したところから再建の道を歩まなければならなかった。このような困難を経て、今日、わが国は、明治以来の近代化への努力の成果をようやく享受しつつあるといえよう。

われわれは、日本の財政の歩みの中に以上のような国の歩みの反映をみるとともに、それをささえている財政の役割の大きさをみることができる。⁶⁾

ここでは、明治維新时期における「文明の落差」の大きさと植民地化への危機意識の高さ、それを反映した近代国家建設に向けたエネルギーの昂揚を強調した上で、その後の歩みが平たんではなく、戦前は「軍事力の強化と経済力の拡充との相克」、戦後は「過去に蓄積した富をすべて喪失したところから再建の道」を歩まねばならなかったこと、そうした困難を超えて、近代化の成果を享受できる状況に到達しつつあることを述べて、読者に対し、日本財政の歩みの中に国の歩みの反映を見、それを支えてきた財政の役割の大きさを見ることを求めている。

c - 3. 1966年度版の冒頭文

戦後の国債政策を歴史的に転換した1965年度第3次補正予算（赤字特例国債の発行）と1966年度当初予算（建設国債の発行）を反映する1966年度版については、本号第1章（2）dで述べた。1966年度版の第3章「財政の歩み——公債を中心として——」の冒頭には次の文章が置かれている。

「戦後20年を経て、わが国の経済は、戦争による混乱とそれからの回復、経済の自立・発展から高度成長、というように、多少の起伏はあったが、ほぼ順調に進んできた。しかし、その成長の過程で徐々に累積してきた矛盾や経済情勢の変化などのために、現在、わが国の経済は一つの転機にさしかかっている。そして、財政にも、これに対応した新しい方針を立てることが要求されている。このような時期にあたって過去のわが国の財政の歩みのなかから今後の参考となるべきものをたずねるのも意義あることであろう。

ここでは、わが国に近代国家の成立した明治維新以来今日までの約100年間の財政・経済について、主として公債を中心に、次の六つの時期に分けてその動きをふり返ってみたい。

- (1) 明治元年より明治26年——近代国家の成立とその基礎固めの時代。
- (2) 明治27年より明治末年——日清・日露の両戦争と戦後のわが国経済について。
- (3) 大正元年より昭和6年まで——第1次世界大戦から昭和初期の金融恐慌と井上財政。
- (4) 昭和7年から昭和20年——高橋財政と満州事変、日華事変を経て太平洋戦争まで。
- (5) 昭和21年から昭和39年——戦後の混乱回復から高度成長の時代まで。
- (6) 昭和40年以後——戦後の財政からの転換、積極的財政政策の出発。⁷⁾

6) 1963年度版、97ページ。

このように、公債発行への転換には、戦後の成長過程で「徐々に累讀してきた矛盾や経済情勢の変化など」で日本経済自体が「一つの転機」にあり、「財政にも、これに対応した新しい方針を立てることが要求されている」ことから、「過去のわが国の財政の歩みのなかから今後の参考となるべきものをたずねる」ことを読者に求めている。

なお、戦後日本経済の歩みを「多少の起伏はあったが、ほぼ順調」と捉えているのは、1963年度版の「平たんなものではなかった」と違っている。

c-4. 1967年度版の冒頭文

翌1967年度版では、「公債を中心」にした日本財政史から通常の日本財政史に戻された。その第3章「財政の歩み」の冒頭は1966年度版と似た文章だが、次のようである。

「戦後も20年を越え、わが国の経済は多少の起伏はあったもののほぼ順調に発展し、先進工業国と比肩しうる地位を占めるにいたっている。この間、経済成長に伴う産業構造の変化等に対応して、財政も時代にふさわしい方針をとることが要求されている。このような時にあたって、過去の財政の歩みをふり返ってそれが経済のなかで果たしてきた役割をたずね、そこから今日的な意義を導き出して今後の参考とすることもたいせつなことであらう。」

ここでは明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを七つの時期に大別し、経済と財政との関連を中心にその動きをふり返ってみることとする。⁷⁾

1967年度版では、「経済成長に伴う産業構造の変化等に対応して、財政も時代にふさわしい方針をとることが要求されている」ことを鑑み、「過去の財政の歩みをふり返ってそれが経済のなかで果たしてきた役割をたずね、そこから今日的な意義を導き出して今後の参考とすること」を読者に求めている。

c-5. 1968年度版

1968年度版の第3章「財政の歩み」の冒頭文は以下の通りである。

「財政は、国民経済のあらゆる分野に深い影響を与えると同時に、国民経済は、また、財政のすべての面に作用を及ぼしている。このような財政と国民経済との相互関係は、国民経済が発展し一国の経済水準が高まり、国民生活の福祉水準が向上すればするほど、密接かつ顕著になっていく傾向がある。財政は、いわば、時代の要請にこたえつつ発展してきているといってよいであろう。このような意味において、わが国の財政が明治初期に近代の財政制度を導入してから今日にいたるまでの現実歩んできた歴史をふり返り、そこから財政の果たしてきた役割の今日的意義を導き出して、今後の参考とすることもまたたいせつなことであらう。」

ここでは明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを七つの時期に大別し、経済と

7) 1966年度版、287～288ページ。

8) 1967年度版、284ページ。

財政との関連を中心にその動きをふり返ってみることとする。』⁹⁾

1968年度版では、「財政と国民経済との相互関係」、あるいは財政は「時代の要請にこたえ」るものであるという一般論を述べた上で、「わが国の財政が明治初期に近代的財政制度を導入してから今日にいたるまでの現実歩んできた歴史をふり返り、そこから財政の果たしてきた役割の今日的意義を導き出して、今後の参考とすること」を歴史編の意図としている。

c - 6. 1969年度版

次の1969年度版の第3章「財政の歴史」の冒頭文は以下の通りである。第1段落は1968年度版とほぼ同じなので¹⁰⁾、繰り返さない。第2段落は大蔵省創立100年を記念する文章に変更されている。

「財政は、国民経済のあらゆる分野に深い影響をうけると同時に、国民経済はまた、財政のすべての面に作用を及ぼしている。このような財政と国民経済との相互関係は、国民経済が発展し一国の経済水準が高まり、国民生活の福祉水準が向上すればするほど、密接かつ顕著になっていく傾向がある。財政はいわば、時代の要請にこたえつつ発展してきているといつてよいであろう。このような意味において、わが国の財政が明治初期に近代的財政制度を導入してから今日にいたるまでの現実歩んできた歴史をふり返り、そこから財政の果たしてきた役割の今日的意義を導き出して、今後の参考とすることもまた大切なことであろう。

とくに本年は明治2年に大蔵省が設置されて以来、ちょうど100年目に当たるわけで、わが国財政の歴史の深みがひとしお強く感ぜられる。』¹¹⁾

ついでながら、この第2段落を受けて、日本財政史の最初の本文(1「近代国家の成立」(1)「近代国家創設期の財政」の第1段落)では大蔵省の設立年月日を記している。『図説』1955～2023年度版計69冊の中で1969年度版だけのことなので、紹介しておこう。

「慶応3年(1867年)10月、徳川慶喜は大政を朝廷に奉還し、ここに慶長以来265年間続いた幕府政治は終りを告げた。次いで同年12月王政復古の発令が発せられ、明治新政府が発足することとなった。改元されて明治元年(1868年)となった翌年には、東京遷都も断行され、新政府の基礎は次第に固められていったが、その前途はきわめて多難であった。すなわち西欧先進諸国のわが国に対する植民地化の圧力を防ぎながら、民族国家的統一と中央集権化への体制を確立するためには、まず、財政の基礎を固める必要があった。そこで旧暦明治2年7月8日(新暦同年8月15日)に大蔵省が設置されついで通貨金融制度の整備、産業の近代的生産様式の確立、近代的軍事力の整備など、つぎつぎと諸制度の改革が着手されていった。しかし、当時のわが国は、資本の蓄積が不足しているうえに生

9) 1968年度版, 295ページ。

10) 「ほぼ」というのは、読点の省略などの違いがあるからである(「国民経済は、また、」→「国民経済はまた」、「財政は、いわば、」→「財政はいわば、」、「たいせいつなこと」→「大切なこと」)。

11) 1969年度版, 81ページ。

産体制も前近代的であって、民間独力による経済発展は望むべくもなかったので、政府は積極的に民間企業に対して援助を行なうとともに、政府みずから産業の経営を行なうなど、産業発展に努力を傾注した。そのうえ、軍備の拡充強化をはかる必要に迫られるなど、新政府が果たさなければならない仕事は多岐にわたった。』¹²⁾

c - 7. 1970年度版

1970年度版から1976年度版までは同じような文章が続くが、各年度版で若干の違いがある。まず、1970年度版では、第3章「財政の歩み」の冒頭に次の文章を掲げていた。

「わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を越える年月がたった。この間をふりかえてみて、あらためて痛感させられることは、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きいものであったかということである。最初の出発点である明治維新のさいも、再出発のときともいえる太平洋戦争終結時も、ともにわが国経済は先進諸国に比べて数段低いところから歩みださねばならなかった。ときどきの要請にこたえつつ、その格差を埋めていくことが、財政に課された使命であったのである。

本章は、わが国財政の、明治初期に近代財政制度を導入してから今日にいたるまでの歩みをふりかえり、今後の財政の役割を考えるうえでの参考に供するものである。』¹³⁾

下線を引いた個所は1959年度版とほぼ同じである（上記c - 1と比較されたい）。1970年度版では、「わが国財政の、明治初期に近代財政制度を導入してから今日にいたるまでの歩みをふりかえり、今後の財政の役割を考えるうえでの参考」とすることを読者に求めている。ただ、一般的な内容で、1959年度版において、戦前の財政は「近代産業の育成と軍事力の拡充を中心とする強力な近代国家の実現」、戦後の財政は「国民全体の福祉の増大」に重点を置いて「くっきりと対照的な性格のちがいがみられる」と書いていたような具体性がない。

c - 8. 1971年度版

1971年度版の第3章「財政の歩み」の冒頭文は、1970年度版とほぼ同じだが（2段落が1段落になった）、「ときどきの要請」以下の文章が変更されている（下線部は変更箇所）。

「わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を越える年月がたった。この間をふりかえてみて、あらためて痛感させられることは、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きいものであったかということである。最初の出発点である明治維新のさいも、再出発のときともいえる太平洋戦争終結時も、ともにわが国経済は先進諸国に比べて数段低いところから歩みださねばならなかった。ときどきの要請にこたえつつ、その格差を埋め、さらに諸国を越えて、わが国経済を発展させていくことが財政に課された使命であった。したがって近世西欧において理想とされた夜警国家的役割にわ

12) 同上、82ページ。

13) 1970年度版、80ページ。

が国財政がとどまる暇はなかったのである。本章は、わか国財政が明治初期に近代財政制度を導入してから今日にいたるまでの現実に歩んできた歴史をふりかえり、今後の財政の役割を考えるうえでの参考に供するものである。¹⁴⁾

このように、「（他の先進）諸国を越えて、わが国経済を発展させていく」、「近世西欧において理想とされた夜警国家的役割にとどまる暇はなかった」など、欧米諸国との対抗心を表した文章である。日本財政が「現実

c－9. 1972年度版

1972年度版の第2章「財政の歩み」は、『図説』の中でも例外的なもので、1「財政活動の長期的傾向」（(1)「公務員数の推移」、(2)国有財産の推移、(3)財政支出の対G N P比の推移、(4)一般会計歳出構成の推移、(5)一般会計歳入構成の推移、(6)一般会計租税収入構成の推移、(7)長期国債残高の対G N P比の推移）という数量的把握を行った上で、2「財政活動の歴史的変遷」で財政史が展開される。

この1972年度版の第2章の冒頭文は以下の通り。

「わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀をこえる年月がたった。この間を振り返ってみて、あらためて痛感されることは、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きかったかということである。本章では、まず、政府活動を体现する主要な諸指標の長期的傾向をグラフによって概観し、その後で、数字に表わされた長期的傾向の背後にある財政制度と財政政策の歴史的変遷が、いかなる政治的、経済的、社会的諸条件のもとで要請されてきたかということを説明する。」¹⁵⁾

このように、1972年度版では、「わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きかったか」、「数字に表わされた長期的傾向の背後にある財政制度と財政政策の歴史的変遷が、いかなる政治的、経済的、社会的諸条件のもとで要請されてきたか」を理解することを読者に求めるものとなっている。

c－10. 1973年度版

1973年度版の第2章「わが国財政の歩み」の冒頭文は、以下のよう

に、第1段落は1971年度版とほぼ同じ、第2段落は1972年度版を短くしたもので、両者の折衷と言える。「わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を超える年月がたった。この間を振り返ってみて、あらためて痛感させられることは、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きいものであったかということである。最初の出発点である明治維新のさいも、再出発点ともいえる太平洋戦争終結時も、ともにわが国経済は欧米先進諸国に比べて数段低いところから歩み出さねばならなかった。そしてときどきの要請に

14) 1971年度版、73ページ。

15) 1972年度版、32ページ。

応えつつ、その格差を埋め、それら諸国に追いつき、わが国経済を発展させていくことが、財政に課された使命であったのである。

本章では、まず、財政活動の長期的傾向を主要な諸指標によって概観し、その後で、これら諸指標に表わされた長期的傾向の背後にある財政制度と財政政策の歴史の変遷を振り返ってみることとする。¹⁶⁾

その歴史編の目的については、上記 c - 8, c - 9 を参照されたい。

c - 11. 1974年度版

1974年度版のⅡ「わが国財政の歩み」は冒頭に以下の文章を掲げた。最初の文章は1973年度版と同じだが、2番目の文章が異なり、「財政の役割の大きさ」を後に回して、「将来へのたゆまざる国民的エネルギーの結集の成果」を強調している。第2段落は1967年度版の形に戻している。

「わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を超える年月がたった。この間わが国はいくつかの大きな難関につきあたった。しかもなお今日の豊かな日本をつくりえたのは、将来へのたゆまざる国民的エネルギーの結集の成果であった。最初の出発点である明治維新の際も、再出発点ともいえる太平洋戦争終結時も、ともにわが国は欧米先進諸国に比べて数段低いところから歩み出さねばならなかった。そしてそのときどきの時代の要請に応えつつ、先進諸国との格差を縮め、それら諸国に追いつき、わが国経済を発展させてゆくことが財政に課せられた使命であった。この間を振り返ってみると、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きいものであったか、あらためて痛感させられる。

本章では、明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを七つの時期に大別し、財政制度と財政政策の歴史の変遷を振り返ってみることとする。¹⁷⁾

c - 12. 1975, 1976各年度版

1975, 1976各年度版のⅡ「わが国財政の歩み」の冒頭文は同じである。

「わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を超える年月が経った。この間、いくつかの大きな難関につきあたりながらも、なお今日の日本をつくり得たのは、将来へのたゆまざる国民的エネルギーの結集の成果であったといえよう。この中にあって財政は、その時々時代の要請に応えつつ、わが国経済をより一層発展させていくという使命を課せられていた。この間を振り返ってみると、「一国隆替の跡は正に財政の沿革に依て之を窮うを得べし」（高橋是清）という言葉が改めて思い出される。

本章では、明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを七つの時期に大別し、財政制度と財政政策の歴史の変遷を振り返ってみることとする。¹⁸⁾

16) 1973年度版, 332ページ。ほぼ同じというのは、「すでに1世紀を超える年月」→「すでに1世紀を超える年月」になっているからである。

17) 1974年度版, 298ページ。

歴史の詳しい大蔵官僚が書いたのか、高橋是清元首相・蔵相の言葉を引用しているのが斬新である。ただし、この頃から冒頭文は短くなっていく。

c-13. 1977～1980各年度版

1977, 1978各年度版のⅡ「わが国財政の歩み」、および1979, 1980各年度版の第4部「わが国財政の歩み」の冒頭文はほぼ同じもので（注19参照）、1976年度版と比べて文章が短くなっている、言い換えれば、冒頭文の形式化が進んでいるといつてよい。

「明治維新を境に近代国家として発足して百有余年、わが国は欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。この間、いくつかの大きな難関につきあたりながらも、なお今日の発展をみたことは、絶ゆまざる国民的努力の成果であったといえよう。

この中において財政の演じた役割は大きなものがあつた。

本章では、明治維新から今日までを七つの時期に大別し、財政制度と財政政策の歴史の変遷を振り返ってみることとする。」¹⁹⁾

c-14. 1981, 1982各年度版

1981, 1982各年度版の第4部「わが国財政の歩み」の冒頭文は同じで、1980年度版までの文章がさらに短くされた。

「近代国家として発足して百十有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、絶ゆまざる国民的努力の成果であり、この中において財政の演じた役割は大きなものであつた。

本章では、明治維新から今日までを七つの時期に大別し、財政制度と財政政策の歴史の変遷を振り返ってみることとする。」²⁰⁾

c-15. 1983～1985年度版

1983～1985各年度版の歴史編は、第1章（2）eで述べたように、戦前財政史と戦後財政史に分かれた。戦後財政史（第1部第2章2）には冒頭文はなく、戦前財政史の第4部「わが国財政の歩み」の冒頭文は以下の通りほぼ同じで（注21参照）、前年度版を継承したものである。戦前だけなので、時期区分が5つから4つに減っている。

「近代国家として百十有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、たゆまざる国民的努力の成果であり、このなかにおいて財政の演じた役割は大きなものであつた。

本章では明治維新から終戦までを四つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。」²¹⁾

18) 1975年度版, 303ページ, 1976年度版, 304ページ。

19) 1977年度版, 305ページ; 1978年度版, 320ページ; 1979年度版, 354ページ; 1980年度版, 312ページ。なお, 1980年度版では「この中において」の改行なし。

20) 1981年度版, 288ページ; 1982年度版, 280ページ。

c-16. 1986年度版

1986年度版の歴史編は戦前・戦後合わせた通史に戻されたが、第4部「わが国財政の歩み」の冒頭文は前年度版とほぼ同じである（注22参照）。

「近代国家として百十有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、たゆまざる国民的努力の成果であり、この中にあって財政の演じた役割は大きなものであった。

ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史的変遷を振り返ってみることとする。」²²⁾

c-17. 1987～1997各年度版

1987年度版の第4部「わが国財政の歩み」の冒頭文は、1986年度版の文章を簡単にして、経済大国を強調したもので、後ろ2行は1986年度版と同じなので省略する。

「明治維新以来、わが国はたゆまざる国民的努力により、いくつかの大きな難関を乗り越え、今や自由世界第2の経済大国に成長した。この発展の中で、財政も大きな役割を担ってきた。」²³⁾

1988、89年度版第4部「わが国財政の歩み」の冒頭文は同じで、1987年度版の「わが国はたゆまざる国民的努力により」と「欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った」を以下のように変更した。第2段落は同じなので省略する。

「明治維新以来、国民の勤勉と創意とに支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割を超える経済大国に成長した。この発展の中で、財政も大きな役割を担ってきた。」²⁴⁾

1990～96年度版の第4部「わが国財政の歩み」の冒頭文は同じで、1988、89年度版の「世界経済の1割を超える」の1割の意味を明確にしたものである。

「明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割（GNPベース）を超える経済大国に成長した。この発展の中で、財政も大きな役割を担ってきた。」²⁵⁾

1997年度版の第4部「わが国財政の歩み」の冒頭文では、「2割（GDPベース）近く」となった。これが最後の冒頭文なので、全文掲げておこう。

「明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の2割（GDPベース）近くの経済大国に成長した。この発展のな

21) 1983年度版、266ページ；1984年度版、286ページ；1985年度版、288ページ。ほぼ同じというのは、「近代国家として発足して百十有余年」→「近代国家として百十有余年」に短くされた。

22) 1986年度版、264ページ。「明治維新から終戦までを四つの時期も」→「明治維新から現在までを五つの時期に」の違いがある。

23) 1987年度版、272ページ。

24) 1988年度版、268ページ；1989年度版、268ページ。

25) 1990年度版、254ページ、1991年度版236ページ、1992年度版、282ページ、1993年度版、282ページ、1994年度版、284ページ、1995年度版286ページ、1996年度版292ページ、

かで、財政も大きな役割をになってきた。」²⁶⁾

以上のように、歴史編の冒頭文は1975年度版頃から短縮され始め、1987年度版からは一層短くされて、若干の言い回しが変更される程度で、前年度版踏襲型の形式的なものになっていった。そうするうちに、編集者または執筆担当者が「形式的な文章は要らない」と思ったかは分からないが、1998年度版から冒頭文は削除され、現在に至っている。

d. 冒頭文の無いもの（1955～1958, 1962, 1964, 1965, 1998～2023年度版）

d-1. 冒頭文の無い歴史編の3つのグループ

歴史編の冒頭に文章が無いものは、1955～1958, 1962, 1964, 1965, 1998～2023年度版の33冊だが、これらは大きく、(α) 1956～58年度版、(β) 1955, 1962, 1964, 1965年度版、(γ) 1998～2023年度版、の3つに分けることができる。

というのは、(α) のグループは、c で紹介したような冒頭文は無いが、歴史編の最初の項全体が冒頭文のようになっており、また (β) のグループは歴史編の近辺などで、意図・目的のようなものが書かれているからである、

それに対し、(γ) の1998年度版から現在（2023年度版）までの『図説』はどこにも歴史編の意図・目的が書かれておらず、目的意識性をなくしている。これは1977年度版頃から冒頭文が短縮・形式化してきたことと前年度版踏襲型編集の結末と言えよう。

ここでは(α) と (β) のグループを紹介する。以下、1955年度版から1965年度版まで時系列で見ていく。なお、1962年度版を除いて、第1章(2)で取り上げているので、背景事情などについてはそちらを参照されたい。

d-2. 1955年度版

まず、『図説』の初版である1955年度版（塩谷忠男編）だが、第11章「日本経済のあゆみと財政」で戦前・戦後の通史をまとめている。それについては、本稿第1章(2) a の a-1 で取り上げたように、当時策定中の経済自立5カ年計画と関係する。

第11章には冒頭文がなく、1「第2次大戦の終了まで」(1)「明治維新から第1次大戦まで」という見出しのあと、「日本の経済は、明治維新とともに長い鎖国のからをやぶって列国との競争に入ったのであるが、その1868年（明治元年）という年には、西欧の先進諸国はすでに産業革命をなし遂げて、海外植民地の獲得に力をそそいでいた」²⁷⁾ という文章で始まる。

ただ、次の第12章「経済自立と財政」の中で、次のように述べている。

「私たちはすでに国の財政活動が今日の経済社会にいかに大きい地位を占めているかをみてきた。国の役割が拡大するにしたがって、財政はいよいよその大きさを増してきたことは明治以来の日本の歴史でも明らかである。財政規模がその前年度より下廻ったことは

26) 1997年度版、268ページ。

27) 1955年度版、280ページ。

この80年にわたる歴史のうちでもわずかに数えるほどしかないことがこの間の事情を物語っている。財政の地位が高まれば高まるほどそのやり方は慎重でなければならぬし、これを能率的、効果的に動かしていくことが必要となってくる。国全体の経済が財政に期待する度合の高いことも今日のような時代はかつてなかった。」²⁸⁾

「繰り返していうように、日本の経済はいまなお自立の段階に達していないし、かつ底の浅い経済である。いちばんの問題は経済そのもののしくみが貿易なくしてやっていけないところにある。アメリカの経済がぼう大な投資と生産とそして消費とによって好況を維持しているように、日本の経済は簡単に投資をふやし、消費を増すわけにはいかない。それは、投資や生産の増大がそのまま輸入の増加にはね返ってくるからである。それは、国際収支の赤字とインフレを起す以外けっきよく何物も経済に与えないのである。

財政規模を増大し、支出を増加することはこれとまったく同様の意味で1つの限界をもっている。いいかえれば、国際収支が赤字にならない限度に止めるということである。明治以来わが国財政のあゆんできた道はすでに第11章で述べた。そこで教えられたことはけっきよく財政規模の膨脹がつねに国際収支の赤字をもたらし、そのあと始末のために、財政の緊縮が繰り返しておこなわれてきたということである。」²⁹⁾

このように、1955年度版の歴史編は、たんに日本経済の発展における財政の地位の大きさを言うだけでなく、「財政規模の膨脹がつねに国際収支の赤字をもたらし、そのあと始末のために、財政の緊縮が繰り返しておこなわれてきた」ことを指摘して、積極財政に警鐘を鳴らすことが目的であったといえよう。

d-3. 1956年度版

1956～1958年度版は、cで見たような形の冒頭文はないが、最初の項全体が冒頭文のようなものになっている。

まず、1956年度版(塩谷忠男編)も前年度と同様、塩谷氏の編集であるから、『図説』歴史編の意図・目的は同じである。それについては、本稿第1章(2)aのa-2で取り上げたように、経済自立5カ年計画と関係する。

1956年度版の第10章「経済自立と財政」1「戦後10年のあゆみ」は1955年度版と異なって戦後財政史のみとなっている。ここには冒頭文がなく、1「戦後10年のあゆみ」(1)「廃墟からの立ちあがり」という見出しのあと、「戦争が終って10年の歳月が流れた。戦火にいためられて1度はどん底におちこんだ日本経済も10年にわたる苦しいたたかいの後に、ようやく自立への基礎を固めることができるようになった」³⁰⁾という文章で始まる。ただ、それに続いて日本経済の復興した姿が述べられ、(1)の最後に以下の文章がくる。

「このように、戦後の経済復興は確かにめざましいものであった。私たちは、今日までになしとげてきた成果をかえりみて大きな自信と誇りを感じるのである。しかし、この復

28) 同上、314ページ。

29) 同上、318-319ページ。

30) 1956年度版、310ページ。

興の道は決してたんたんとして安らかなものではなかった。インフレとデフレの波とたたかい、多くの困難を克服し、試練を経てようやく到達した彼岸であるが、しかも経済の自立はこれで終わったのではない。むしろほんとうの自立はこれからといわれている。私たちは、新たな勇気をもって今後の建設に当らねばならない。

そこでまずこの10年のあゆみをふり返ってみることとしよう。』³¹⁾

これを受けて、(2)「インフレとのたたかい」、(3)「ドッジ・ラインの進展」、(4)「朝鮮動乱後のブーム」、(5)「緊縮政策への転換」、という順で「インフレとデフレの波」が展開されている。その意味では、(1)の全体が長い冒頭文と言えるだろう。

なぜ「インフレとデフレの波」を述べるのかといえ、「世間では、経済の発展をはかっていくためには多少公債を発行してもやむを得ないのではないか」という議論がある。ことに、昨今のように民間の金融機関に余裕資金が豊富に集まっている時には、公債を発行してもインフレーションになるおそれはないという有力な意見もある」³²⁾からである。

そのような意見に対し、1956年度版は次のように言う。

「なるほど公債発行が限られたわく内に止まり、しかもその使い道が生産的であるときには、現在の金融情勢ではインフレをおこす心配はあまりないかもしれない。問題は公債の発行に適当な限度が設けられるという保証がないこと、公債の発行によって国の支出が増加し、民間の経済がこれに応じて安易な膨脹に転じたときに果して現在のような金融情勢が維持できるかどうかということ、そして何より大切なことは公債によってまかなった資金が生産的に使われるとは限らないということの諸点にある。公債の発行は租税と異なって国民にさし当って苦痛を与えるものではない。ずるずるとその金額が増加し、これが日本銀行の引受によって発行されるようになったとき果して健全財政といえるであろうか。私たちはインフレーションがいかに無駄でおそろしいものであるかをいくたびか経験した。当面はまだ公債発行を考える時期ではないように思う。」³³⁾

この「無駄でおそろしい」インフレーションの経験を知らしめるものが、第10章1の戦後財政史である。

d-4. 1957年度版

1957年度版（塩谷忠男編）も1955・1956年度版と同じ編者で、歴史編の意図・目的は同じである。それについては、第1章（1）aのa-2で述べた。

前年度版と同様、その第10章「経済自立と財政」1「戦後財政の歩み」では戦後財政史のみが展開されている。

冒頭文はなく、1「戦後財政の歩み」は(1)「日本経済の復興」の見出しの後、「わが国は、第2次大戦によってまことに致命的な損害を被った。死者、行方不明者は186万人を数え、工場や住宅など国富の1/4を失い、また領土は半減した。生産はほとんど停止して

31) 同上、311～312ページ。

32) 同上、345ページ。

33) 同上。

終戦直後には戦前の1割程度にまで低下したといわれている。このような経済のまひ状態の中であって政治は混乱し、国民はそのむかうべき方向を見失い、人々は長く虚脱の状態を脱することができなかった³⁴⁾という文章がくる。

ただ、前年度版と同様、この文章の後、戦後11年を経て日本経済が復旧・復興した姿を描いて、「経済の復興時代はすでに終わった」³⁵⁾と述べた上で、次のように書いている。

「ところで、今や私たちの前途には困離な経済の局面が新しく展開されようとしている。それは独り立ちした日本が今後国際収支を均衡させながらいかにその経済的地位を高め、そして自国の経済の発展をはかるかということである。資源の乏しいわが国経済の発展はどうしても輸出を伸ばし、外貨を獲得して重要資源を輸入するよりほかに道がない。このため国際収支の均衡をはかるということが、まず第1の要件でなければならない。その遂行は、今までの一本調子の経済の回復よりもかえって困難でさえある。そこにはいぜんとしてインフレとの戦いがあると同時に、またデフレの脅威にも備えなければならぬ。

私たちはいまこのような経済の転換点に立って今後の正しい財政の在り方を考えなければならないのであるが、その前に、これまで経済の回復過程において財政の歩んできた道をもう1度反省してみることにしよう。」³⁶⁾

これを受けて、(2)「戦後インフレとドッジ・ライン」、(3)「朝鮮動乱から緊縮政策へ」が展開されている。その意味で、1956年度版と同様、(1)「日本経済の復興」の全体が冒頭文と言えよう。すなわち、歴史編の目的は「インフレとの戦い」と「デフレの脅威」への備えの重要性を教えることにある。

d-5. 1958年度版

1958年度版(中嶋晴雄編)は、第1章「国の経済と財政」の3「戦後の財政の歩み」で戦後財政史を展開している。それについては、本稿第1章(1)aのa-3で述べた。

3「戦後の財政の歩み」には、cで紹介したような冒頭文はない。

最初の項(1){日本経済の復興と発展}は、「明治以来近代国家として発展してきたわが国は、第2次大戦によって致命的な打撃を受けた。領土は半減し、死者行方不明者は185万人を数え、工場や住宅など国富の25%を失った。生産は、終戦直後にはほとんど停止し、戦前の1割程度にまで低下したといわれている。このような経済のまひ状態に加えて、政治は混乱し、国民はそのむかうべき方向を見失い、人人は虚脱状態のなかであって、その日の糧を得るのに狂奔するありさまであった。それから13年の歳月が流れた」³⁷⁾という文章で始まる。

ただ、前年度版と同様、(1)の後半で次のように述べている。

「いうまでもなく、戦後経済の再建に果たした財政の役割ははなはだ大きかった。明治

34) 1957年度版、315ページ。

35) 同上、316ページ

36) 同上。

37) 1958年度版、23ページ。

以来、わが国の経済は富国強兵策といわれるように、強力な財政の支えによって先進工業国に迫る域にまで達したが、敗戦の痛手をいやすためにも、財政のはたらきに期待するところがまことに大きかったのである。

戦後12年の財政の推移をふりかえってみると、その政策のすべてが十分な効果をあげたとは必ずしもいえないかもしれない。しかし、いずれにしても、わが国経済が歩んできた苦難の道は、同時にわが国の財政が辿ってきた道でもあったのである。戦後の財政が国民経済や国民生活に与えた効果を正しく評価するためには、なお今後ある程度年月をへだてて検討する必要があるだろう。ここでは、戦後財政の大筋だけを辿って、昭和33年度の予算に具体化している現在の財政政策までの系譜を明らかにしておこう。³⁸⁾

これを踏まえて、(2)「戦後インフレからドッジ・ラインへ」、(3)「朝鮮動乱から引締政策へ」、(4)「数量景気から再度の引締めへ」が展開される。

そして(5)「財政の歩みから学ぶもの」を置いて、次のように言う。

「以上敗戦の日から昭和33年度予算が編成されるまでの日本経済の歩みと、そのなかで財政が果たした役割をのべてきた。これによっても、戦後のわが国経済の復興と発展が決して坦々としたものではなかったことがわかる。そこにはいくつかのインフレとデフレの波があり、これをくぐりぬけてようやくここまで辿りついたのである。」³⁹⁾

戦後のわが国経済は、廃墟のなかから立ち上ったため、復興のための需要が異常に強く、これが一貫して経済の早い成長を支えてきた。生産や貿易の伸びにしても、財政支出や銀行貸出の増加にしても、年々1割とか2割といった拡大がつづいてきたのである。私たちの感覚も、こういう数字に馴れてしまっている。しかし、よく考えてみると、このように激しい伸びは異常なものにちがいない。子供の時は背だけが年に10㎝もそれ以上も伸びるが、おとなになると、そうはいかない。経済が年々実質的に成長するのは、結局は人口が増加するのに加えて1人当りの生産性が向上するからである。それにはおのずから限界がある。その限界をこえて、企業の投資や銀行貸出が年に数割も増減するということは、結局は資本の蓄積が貧しい上に企業が無駄な競走に走るからで、まことに悲しむべきことである。経済が成長するのにともなって、着実なペースで財政や金融のバンドをゆるめてゆくことはさしつかえない。しかし、食いすぎて一時にバンドをゆるめると、かならずその反動としてバンドを締めなおさなければならないときがくる。ことに国内資源に乏しく、貿易に依存することの多いわが国では、バンドの長さ自体に制約があることを、つねに忘れてはなるまい。戦後の財政や経済の日まぐるしい変化は、そのことを私たちに教える。」³⁹⁾

これを踏まえて、4「財政と経済歩発展」で財政政策のあるべき姿を示している。

引用文中の「インフレとデフレの波」は塩谷氏から受け継いだものと思われるが、いずれにせよ、歴史編の目的は、資源の乏しい日本には「財政と金融というバンド」の長さ自

38) 同上、24～25ページ。

39) 同上、34～35ページ。

体に制約があることを踏まえ、「インフレとデフレの波」という歴史的経験を認識させることにあるといえよう。

d - 6. 1962年度版

1962年度版（青鹿明司編）の第3章「日本の財政の歩み」は戦前・戦後の通史タイプで、cのような冒頭文はない。第3章は1「明治維新より終戦まで」と2「終戦から現在まで」の2節建てである。

1の(1)「明治維新时期」は、「慶応3年（西暦1867年）、将軍徳川慶喜は朝廷に政権を奉還し、翌年、年号も明治と改められて、ここにわが国は近代国家として脱皮し、財政も新しい歩みをはじめることとなった」⁴⁰⁾という文章で始まり、明治維新时期の財政が解説され、上記した1955～1958年度版のように(1)が長い冒頭文となっているわけではない。

ただ、2「終戦から現在まで」の最後は次の文章である。

「以上明治維新から最:近までにわたって日本経済の動きの中で財政の歩んだ跡を見てきたが、よい意味でも悪い意味でも財政の果たした役割がきわめて大きかったことがわかる。私たちはこのような歴史の反省の上に立って、財政の正しいあり方を考えていかなければならない。」⁴¹⁾

このように、1962年度版は最後になって、日本経済の中で財政の役割が「よい意味でも悪い意味でも」きわめて大きかったと述べ、「歴史の反省の上に立って、財政の正しいあり方を考えて」いくことを求めている。

なお、1962年度版は珍しく「はしがき」で歴史編のことを以下のように触れている。

「今日の社会で、財政は国民経済、個人生活と深いつながりを持つようになってきている。それだけに、また、財政のしくみも内容も複雑多岐なものにならざるをえない。このような財政の全体の姿を正しく理解することはなかなか容易でない。ある国の経済社会の移り変わりの中で、財政のいとなんだ役割を歴史的にながめてみることも一方法であろうし、経済主体として財政のもつ特異性に着目して国民経済との関連を理論的に解明することも意味があるであろう。しかし、現実の財政をありのままにとらえて、これを研究分析してみることがいちばん捷徑のように思われる。

今年で8回めの誕生を迎えた『図説日本の財政』のそもそものねらいも、各年度の日本の財政の全貌をわかりやすく紹介することであって、本書でも、昭和37年度予算の背景と内容を体系的に明らかにすることを中心の課題としているが、歴史的な位置づけや経済的な機能などにもふれて、できるだけ立体化することに努めたつもりである。ただ、微力なため意に満たぬところが多く、読者各位の期待に添いえなかったのではないかと思う。これからも変わらぬ激励と叱正をいただければ幸いである。」⁴²⁾

このように、歴史編は財政学習を「立体化」するものと位置付けられている。

40) 1962年度版、101ページ。

41) 同上、123ページ。

42) 同上、はしがき、i ページ。

d - 7. 1964年度版

1964年度版（前川憲一編）の歴史編は、第2部「財政の働きとしくみ」第3章「戦後財政の歩み」で戦後史のみである。これについては本稿第1章（2）bで述べた。

冒頭文はなく、第3章やその他の個所にも歴史編の意図・目的を述べた文章はとくに見当たらない。

なお、「はしがき」で以下のように述べて、歴史編が「主として理論的な部分に興味を持たれる読者を念頭に」おいたものとされている。

「本書も今年で10回めの誕生を迎えた。できるだけ具体的な事実在即し、財政をありのままの姿でとらえようというねらいは、これまでと同様、今度も一貫したつもりである。さらに今年は次のような新味を加えてみた。第1に、全体の構成を2分し、第1部では昭和39年度予算の背景と内容を紹介することとし、第2部では主として理論的な部分に興味を持たれる読者を念頭において、国民経済のなかで財政の果たす役割を歴史的・理論的に解明し、さらに財政の仕組みをわかりやすく説明することとした。第2には、「図説」という本書の特色をさらに活かして若干の写真を挿入して柔らかさを出すこととした。」⁴³⁾

d - 8. 1965年度版

1965年度版（前川憲一編）は1964年度版と同じ編者である。第2部「財政の働きとしくみ」の第3章「戦後財政の歩み」で戦後史を解説している。これについては、本稿第1章（2）cで述べた。

1964年度版と同様、冒頭文はなく、第3章やその他の個所にも歴史編の意図・目的を述べた文章はとくに見当たらない。

ただ、前年度より公債発行問題が大きくなったこともあって、歴史編の前の章を1964年度版の第1章「財政の働きと国民経済」、第2章「財政のしくみ」という順序から、1965年度版では第1章「財政のしくみ」、第2章「財政の働き」に入れ替え、第2章「財政の働き」の最後の節、つまり歴史編の直前に、3「今後の財政政策の考え方」を置いているのが特徴的である。そこでは次のように述べている。

「戦後20年、わが国経済は、生産と国民生活の水準を戦前の水準に戻すことを目標とした復興の段階、つまり量的拡大第1の段階から出発し、この自立経済の上に立って経済の拡大と近代化を進め、同時に国際経済社会における地位を着実に向上させてきた高度成長の時代、つまり実力涵養の時代を経て、いまや新しい段階にはいっているといえる。

これからのわが国経済の課題は、国際収支の均衡と物価の安定を確保できる範囲内で、適度で着実な成長をつづけながら、内にあっては各分野の合理化・近代化を進め、名実ともに先進国と肩を並べられるような経済社会の質的充実を図り、外にあっては先進国の一員として世界の繁栄にいっそう貢献していくことであるといえよう。

こうした情勢に対処し、今後の財政はどうあるべきか、最後に財政政策の課題について

43) 1964年度版、はしがき、ii ページ。

考えてみよう。」⁴⁴⁾

そして「今後の財政政策の考え方」の最後に(4)「公債発行問題」を持ってきて、「最近「公債発行」に関する論議が、調和のとれた経済発展に関連して、さかんに行なわれている」⁴⁵⁾と述べて、理論的には、「民間で消化される公債の発行はかならずしもインフレ的ではないし、とくに経済が停滞している場合には、むしろ望ましい政策手段だとされている。また金融面からみても、現在のわが国では、経済規模に対し金融資産の割合が非常に低いから、公債の発行は、これを補い金融市場の円滑な働きを助けることになるといえる」⁴⁶⁾と受け止めた上で、次のように言う。

「しかし、こうした考え方は、公債の発行が経済情勢の推移に応じてきわめて弾力的に行なわれるという約束の上に立っている。すなわち、必要があれば発行し、必要がなくなればやめる。あるいは場合によっては償還を行なっていくということを前提にしているのである。そうした弾力的な公債発行ができるという保証がないままに発行を行なった場合には、そのままずるずると安易な財政規模の膨張を招き、経済の需給のバランスをそこない、やがて国際収支や物価の面で破綻をきたしてしまうことになるであろう。また、それは日本に対する国際信用を傷つけることにもなる。」⁴⁷⁾

そして「弾力的な公債発行を行ないうるためには」、①財政体質の改善、②公社債市場の育成、③支出対象の選択、④発行の背景となる経済情勢と公債の弾力的発行、という問題を解決しなければならず、「要するに、公債発行に踏み切るには、十分時機の熟するのを待つ必要があるということである。公債発行が弾力的に行なえるという自信がつくまで、軽々に財源不足すなわち公債という議論は慎まなければなるまい」⁴⁸⁾と結論したうえで、歴史編に移る。

言い換えれば、公債発行によって「安易な財政規模の膨張を招き、経済の需給のバランスをそこない、やがて国際収支や物価の面で破綻をきたしてしまう」ことの実験の経験を戦後財政史から学ぶことを求めていると読めなくはない。そういう回りくどい形で歴史編の意図・目的が暗黙に記されていると言えよう。

* * *

1998～2023年度版についてはすでにc-17, d-1で述べたので、繰り返さない。

(第1章終わり)

44) 1965年度版, 301ページ。

45) 同上, 306ページ。

46) 同上。

47) 同上。

48) 同上, 307ページ。

表15-1 『図説』日本財政史(部・章・節)の冒頭文の変遷(1955~65年度版)

『図説』日本財政史(部・章・節)の冒頭文	
◆1955年度版 第11章「日本経済のあゆみと財政」(冒頭文なし)	
◆1956年度版 第10章「経済自立と財政」1「戦後10年のあゆみ」(冒頭文なし)	
◆1957年度版 第10章「経済自立と財政」1「戦後10年の歩み」(冒頭文なし)	
◆1958年度版 第1章「国の経済と財政」3「戦後の財政の歩み」(冒頭文なし)	
◆1959年度版 第2章「わが国財政の歩み」	わが国が近代国家としての歩みをはじめから、すでに1世紀近い年月が経った。最初の出発である明治維新の際にも、再出発の時ともいえる第2次大戦終了時にも、ともにわが国は先進諸国にくらべていわば数段低いところから歩み出さねばならなかった。そのハンディキャップを埋めてゆくために、財政に与えられた役割は、常に大きいものであった。もちろんその間の財政には、ヨーロッパ諸国の長い歴史の間に生じた移り変わりと同様のものを見ることはできない。むしろ、1世紀近い間に西欧の数百年の歩みが圧縮されているともいえる。財政の仕事もしだいに大きくまた複雑になってきたが、第2次大戦の終了を境として、くっきりと対照的な性格のちがいがみられる。戦前の財政の重点が近代産業の育成と軍事力の拡充を中心とする強力な近代国家の実現にあったとすれば、戦後のそれは国民全体の福祉の増大にあるといえよう。
◆1960年度版 第2章「わが国財政の歩み」	わが国が近代国家としての歩みをはじめから、すでに1世紀近い年月が経った。最初の出発である明治維新の際にも、再出発の時ともいえる第2次大戦終了時にも、ともにわが国は先進諸国にくらべていわば数段低いところから歩み出さねばならなかった。そのハンディキャップを埋めてゆくために、財政に与えられた役割は、常に大きいものであった。もちろんその間の財政には、ヨーロッパ諸国の長い歴史の間に生じた移り変わりと同様のものを見ることはできない。むしろ、1世紀近い間に西欧の数百年の歩みが圧縮されているともいえる。財政の仕事もしだいに大きくまた複雑になってきたが、第2次大戦の終了を境として、くっきりと対照的な性格のちがいがみられる。戦前の財政の重点が近代産業の育成と軍事力の拡充を中心とする強力な近代国家の実現にあったとすれば、戦後のそれは国民全体の福祉の増大にあるといえよう。
◆1961年度版 第3章「日本の財政の歩み」	わが国が近代国家としての歩みをはじめから、すでに1世紀近い年月が経った。最初の出発である明治維新の際にも、再出発の時ともいえる第2次大戦終了時にも、ともにわが国は先進諸国にくらべていわば数段低いところから歩み出さねばならなかった。そのハンディキャップを埋めてゆくために、財政に与えられた役割は、常に大きいものであった。もちろんその間の財政には、ヨーロッパ諸国の長い歴史の間に生じた移り変わりと同様のものを見ることはできない。むしろ、1世紀近い間に西欧の数百年の歩みが圧縮されているともいえる。財政の仕事もしだいに大きくまた複雑になってきたが、第2次大戦の終了を境として、くっきりと対照的な性格のちがいがみられる。戦前の財政の重点が近代産業の育成と軍事力の拡充を中心とする強力な近代国家の実現にあったとすれば、戦後のそれは国民全体の福祉の増大にあるといえよう。
◆1962年度版 第3章「日本の財政の歩み」(冒頭文なし)	
◆1963年度版 第3章「日本の財政の歩み」	長い鎖国の禁を解いたとき、すでに産業革命を終えた西欧諸国とわが国との文明の落差は大きく、人びとはそこにわが国の危機を感じた。明治維新は、このような危機に立って、みずからの独立を守るため、古い政治体制を廃し、西欧的な学料、技術、制度をとり入れて近代国家を建設しようとする、民族のエネルギーを示すものであった。 それから、およそ、1世紀に近い年月が流れた。この間の歩みは、もちろん平たんなものではなかった。戦前においては、戦争の連続の中で、軍事力の強化と経済力の拡充との相克を経験しなければならなかったし、また、戦後においては、過去に蓄積した富をすべて喪失したところから再建の道を歩まなければならなかった。このような困難を経て、今日、わが国は、明治以来の近代化への努力の成果をようやく享受しつつあるといえよう。 われわれは、日本の財政の歩みの中に以上のような国の歩みの反映をみるとともに、それをささえている財政の役割の大きさをもみることができる。
◆1964年度版 第2部第3章「戦後財政の歩み」(冒頭文なし)	
◆1965年度版 第2部第3章「戦後財政の歩み」(冒頭文なし)	

表15-2 『図説』日本財政史（部・章・節）の冒頭文の変遷（1966～70年度版）

『図説』日本財政史（部・章・節）の冒頭文
◆1966年度版 第2部第3章「財政の歩み——公債を中心として——」 戦後20年を経て、わが国の経済は、戦争による混乱とそれからの回復、経済の自立・発展から高度成長、というように、多少の起伏はあったが、ほぼ順調に進んできた。しかし、その成長の過程で徐々に累積してきた矛盾や経済情勢の変化などのために、現在、わが国の経済は一つの転機にさしかかっている。そして、財政にも、これに対応した新しい方針を立てることが要求されている。このような時期にあたって過去のわが国の財政の歩みのなかから今後の参考となるべきものをたずねるのも意義あることであろう。 ここでは、わが国に近代国家の成立した明治維新以来今日までの約100年間の財政・経済について、主として公債を中心に、つぎの六つの時期に分けてその動きをふり返ってみたい。 (1) 明治元年より明治26年——近代国家の成立とその基礎固めの時代。 (2) 明治27年より明治末年——日清・日露の両戦争と戦後のわが国経済について。 (3) 大正元年より昭和6年まで——第1次世界大戦から昭和初期の金融恐慌と井上財政。 (4) 昭和7年から昭和20年——高橋財政と満州事変、日華事変を経て太平洋戦争まで。 (5) 昭和21年から昭和39年——戦後の混乱回復から高度成長の時代まで。 (6) 昭和40年以後——戦後の財政からの転換、積極的財政政策の発効。
◆1967年度版 第2部第3章「財政の歩み」 戦後も20年を越え、わが国の経済は多少の起伏はあったもののほぼ順調に発展し、先進工業国と比肩する地位を占めるにいたっている。この間、経済成長に伴う産業構造の変化等に対応して、財政も時代にふさわしい方針をとることが要求されている。このような時にあたって、過去の財政の歩みをふり返ってそれが経済のなかで果たしてきた役割をたずね、そこから今日の意義を導き出して今後の参考とすることもたいせつなことであろう。 ここでは明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを七つの時期に大別し、経済と財政との関連を中心にその動きをふり返ってみることとする。
◆1968年度版 第2部第3章「財政の歩み」 財政は、国民経済のあらゆる分野に深い影響を与えると同時に、国民経済は、また、財政のすべての面に作用を及ぼしている。このような財政と国民経済との相互関係は、国民経済が発展し一国の経済水準が高まり、国民生活の福祉水準が向上すればするほど、密接かつ顕著になっていく傾向がある。財政は、いわば、時代の要請にこたえつつ発展してきているといつてよいであろう。このような意味において、わが国の財政が明治初期に近代的財政制度を導入してから今日にいたるまでの現実に進んできた歴史をふり返り、そこから財政の果たしてきた役割の今日的意義を導き出して、今後の参考とすることもまたたいせつなことであろう。 ここでは、明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを七つの時期に大別し、財政と経済の関係をを中心にその動きをふり返ってみることとする。
◆1969年度版 第3章「財政の歴史」 財政は国民経済のあらゆる分野に深い影響を与えると同時に、国民経済はまた、財政のすべての面に作用を及ぼしている。このような財政と国民経済との相互関係は、国民経済が発展し、一国の経済水準が高まり、国民生活の福祉水準が向上すればするほど、密接かつ顕著になっていく傾向がある。財政はいわば、時代の要請にこたえつつ発展してきているといつてよいであろう。このような意味において、わが国の財政が明治初期に近代的財政制度を導入してから、今日に至るまでの現実に進んできた歴史をふり返り、そこから財政の果たしてきた役割の今日的意義を導き出して今後の参考とすることもまた大切なことであろう。 とくに本年は明治2年に大蔵省が設置されて以来、ちょうど100年目に当たるわけで、わが国財政の歴史の深みがひとしお強く感ぜられる。
◆1970年度版 第3章「財政の歩み」 わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を越える年月がたった。この間をふりかえってみて、あらためて痛感させられることは、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きいものであったかということである。最初の出発点である明治維新のさいも、再出発のときともいえる太平洋戦争終結時も、ともにわが国経済は先進諸国に比べて数段低いところから歩みださねばならなかった。ときどきの要請にこたえつつ、その格差を埋めていくことが、財政に課された使命であったのである。 本章は、わが国財政の、明治初期に近代財政制度を導入してから今日にいたるまでの歩みをふりかえり、今後の財政の役割を考えるうえでの参考に供するものである。

表15-3 『図説』日本財政史(部・章・節)の冒頭文の変遷(1971~76年度版)

『図説』日本財政史(部・章・節)の冒頭文	
◆1971年度版 第3章「財政の歩み」	
わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を超える年月がたった。この間をふりかえてみて、あらためて痛感させられることは、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きいものであったかということである。最初の出発点である明治維新のさいも、再出発のときともいえる太平洋戦争終結時も、ともにわが国経済は先進諸国に比べて数段低いところから歩みださねばならなかった。ときどきの要請にこたえつつ、その格差を埋め、さらに諸国を越えて、わが国経済を発展させていくことが財政に課された使命であった。したがって近世西欧において理想とされた夜警国家的役割にわが国財政がとどまる暇はなかったのである。本章は、わが国財政が明治初期に近代財政制度を導入してから今日にいたるまでの現実歩んできた歴史をふりかえり、今後の財政の役割を考えるうえでの参考にするものである。	
◆1972年度版 第2章「財政の歩み」	
わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀をこえる年月がたった。この間を振り返ってみて、あらためて痛感されることは、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きかったかということである。本章では、まず、政府活動を体現する主要な諸指標の長期的傾向をグラフによって概観し、その後で、数字に表わされた長期的傾向の背後にある財政制度と財政政策の歴史の変遷が、いかなる政治的、経済的、社会的諸条件のもとで要請されてきたかということを説明する。	
◆1973年度版 第2章「わが国財政の歩み」	
わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を超える年月がたった。この間を振り返ってみて、あらためて痛感させられることは、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きいものであったかということである。最初の出発点である明治維新のさいも、再出発点ともいえる太平洋戦争終結時も、ともにわが国経済は欧米先進諸国に比べて数段低いところから歩み出さねばならなかった。そしてときどきの要請に応えつつ、その格差を埋め、それら諸国に迫りつき、わが国経済を発展させていくことが、財政に課された使命であったのである。 本章では、まず、財政活動の長期的傾向を主要な諸指標によって概観し、その後で、これら諸指標に表わされた長期的傾向の背後にある財政制度と財政政策の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1974年度版 第2部II「わが国財政の歩み」	
わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を超える年月がたった。この間わが国はいくつかの大きな難関につきあつた。しかもなお今日の豊かな日本をつくりえたのは、将来へのたゆまざる国民的エネルギーの結集の成果であった。最初の出発点である明治維新の際も、再出発点ともいえる太平洋戦争終結時も、ともにわが国は欧米先進諸国に比べて数段低いところから歩み出さねばならなかった。そしてそのときどきの時代の要請に応えつつ、先進諸国との格差を縮め、それら諸国に迫りつき、わが国経済を発展させてゆくとが財政に課せられた使命であった。この間を振り返ってみると、わが国経済の発展において財政の演じた役割がいかに大きいものであったか、あらためて痛感させられる。 本章では、明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを七つの時期に大別し、財政制度と財政政策の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1975年度版 第2部II「わが国財政の歩み」	
わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を超える年月が経った。この間、いくつかの大きな難関につきあたりながらも、なお今日の日本をつくり得たのは、将来へのたゆまざる国民的エネルギーの結集の成果であったといえよう。この中にあって財政は、その時々時代の要請に応えつつ、わが国経済をより一層発展させていくという使命を課せられていた。この間を振り返ってみると、「一国隆替の跡は正に財政の沿革に依て之を窮うを得べし」(高橋是清)という言葉が改めて思い出される。 本章では明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを7つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみる。	
◆1976年度版 第2部II「わが国財政の歩み」	
わが国が近代国家としての歩みを始めてから、すでに1世紀を超える年月が経った。この間いくつかの大きな難関につきあたりながらも、なお今日の日本をつくり得たのは、将来へのたゆまざる国民的エネルギーの結集の成果であったといえよう。この中にあって財政は、その時々時代の要請に応えつつ、わが国財政をより一層発展させていくという使命を課せられていた。この間を振り返ってみると、「一国隆替の跡は正に財政の沿革に依て之を窮うを得べし」(高橋是清)という言葉が改めて思い出される。 本章では、明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを7つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみる。	

表15-4 『図説』日本財政史（部・章・節）の冒頭文の変遷（1977～84年度版）

『図説』日本財政史（部・章・節）の冒頭文	
◆1977年度版 第2部Ⅱ「わが国財政の歩み」	明治維新を境に近代国家として発足して百有余年、わが国は欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。この間、いくつかの大きな難関につきあたりながらも、なお今日の発展をみたことは、絶ゆまざる国民的努力の成果であったといえよう。 この中において財政の演じた役割は大きなものがあった。 本章では明治維新のわが国近代財政の萌芽から今日までを7つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみる。
◆1978年度版 第2部Ⅱ「わが国財政の歩み」	明治維新を境に近代国家として発足して百有余年、わが国は欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。この間、いくつかの大きな難関につきあたりながらも、なお今日の発展をみたことは、絶ゆまざる国民的努力の成果であったといえよう。 この中において財政の演じた役割は大きなものがあった。 本章では明治維新から今日までを7つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。
◆1979年度版 第4部「わが国財政の歩み」	明治維新を境に近代国家として発足して百有余年、わが国は欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。この間、いくつかの大きな難関につきあたりながらも、なお今日の発展をみたことは、絶ゆまざる国民的努力の成果であったといえよう。 この中において財政の演じた役割は大きなものがあった。 本章では明治維新から今日までを7つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。
◆1980年度版 第4部「わが国財政の歩み」	明治維新を境に近代国家として発足して百有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、絶ゆまざる国民的努力の成果であり、この中において財政の演じた役割は大きなものがあった。 本章では明治維新から今日までを7つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。
◆1981年度版 第4部「わが国財政の歩み」	近代国家として発足して百十有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、絶ゆまざる国民的努力の成果であり、この中において財政の演じた役割は大きなものであった。 本章では明治維新から今日までを七つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。
◆1982年度版 第4部「わが国財政の歩み」	近代国家として百十有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、たゆまざる国民的努力の成果であり、このなかにおいて財政の演じた役割は大きなものであった。 本章では明治維新から今日までを七つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。
◆1983年度版 1部第2章2「日本の財政政策」（冒頭文なし）／第4部「わが国財政の歩み」	近代国家として百十有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、たゆまざる国民的努力の成果であり、このなかにおいて財政の演じた役割は大きなものであった。 本章では明治維新から終戦までを四つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。
◆1984年度版 1部第2章2「日本の財政政策」（冒頭文なし）／第4部「わが国財政の歩み」	近代国家として百十有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、たゆまざる国民的努力の成果であり、この中において財政の演じた役割は大きなものであった。 ここでは明治維新から終戦までを四つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。

表15-5 『図説』日本財政史（部・章・節）の冒頭文の変遷（1985～93年度版）

『図説』日本財政史（部・章・節）の冒頭文	
◆1985年度版 1部第2章2「日本の財政政策」（冒頭文なし）／第4部「わが国財政の歩み」	
近代国家として百十有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、たゆまざる国民的努力の成果であり、この中において財政の演じた役割は大きなものであった。ここでは明治維新から終戦までを四つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1986年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
近代国家として百十有余年、わが国はいくつかの大きな難関を乗り越え、欧米諸国に比べ遜色のない経済力を備えるに至った。今日の発展は、たゆまざる国民的努力の成果であり、この中において財政の演じた役割は大きなものであった。ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1987年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、わが国はたゆまざる国民的努力により、いくつかの大きな難関を乗り越え、今や自由世界第2の経済大国に成長した。この発展の中で、財政も大きな役割を担ってきた。ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1988年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意とに支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割を超える経済大国に成長した。この発展の中で、財政も大きな役割を担ってきた。ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1989年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意とに支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割を超える経済大国に成長した。この発展の中で、財政も大きな役割を担ってきた。ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1990年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割（GNPベース）を超える経済大国に成長した。この発展の中で、財政も大きな役割を担ってきた。ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1991年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割（GNPベース）を超える経済大国に成長した。この発展の中で、財政も大きな役割を担ってきた。ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1992年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割（GNPベース）を超える経済大国に成長した。この発展の中で、財政も大きな役割を担ってきた。ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1993年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割（GNPベース）を超える経済大国に成長した。この発展のなかで、財政も大きな役割を担ってきた。ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	

表15-6 『図説』日本財政史（部・章・節）の冒頭文の変遷（1994～2023年度版）

『図説』日本財政史（部・章・節）の冒頭文	
◆1994年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割（GNPベース）を超える経済大国に成長した。この発展のなかで、財政も大きな役割を担ってきた。 ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1995年度版 第4部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割（GNPベース）を超える経済大国に成長した。この発展のなかで、財政も大きな役割を担ってきた。 ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1996年度版 第IV部「わが国財政の歩み」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の1割（GNPベース）を超える経済大国に成長した。この発展のなかで、財政も大きな役割をになってきた。 ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1997年度版 第IV部「わが国財政のあゆみ」	
明治維新以来、国民の勤勉と創意に支えられ、いくつかの大きな難関を乗り越えたわが国は、今や世界経済の2割（GDPベース）近くの経済大国に成長した。この発展のなかで、財政も大きな役割をになってきた。 ここでは明治維新から現在までを五つの時期に大別し、財政政策と財政制度の歴史の変遷を振り返ってみることとする。	
◆1998年度版 第IV部「わが国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆1999年度版 第IV部「わが国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2000年度版 第IV部「わが国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2001年度版 第IV部「わが国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2002年度版 第IV部「わが国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2003年度版 第IV部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2004年度版 第IV部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2005年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2006年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2007年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2008年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2009年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2010年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2011年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2012年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2013年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2014年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2015年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2016年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2017年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2018年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2019年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2020年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2021年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2022年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	
◆2023年度版 第III部「我が国財政のあゆみ」（冒頭文なし）	

（出所）『図説』各年度版，より作成。